

令和元年度 学校評価

尼崎市立小園小学校

1 学校教育目標

「認め合い 支え合い 高めあい」～子どもの主体的な取組を重んじ、子どもが生き生きと活動する学校～

2 重点取組事項

- ・児童一人一人の教育的ニーズに応じた教育活動を推進するとともに、主体的・対話的に学ぶ学習を通して学力向上を図る。
- ・児童の主体性を尊重し、育ちを最大限に支えることで、達成感や成功体験を味わわせ、自尊感情や自己有用感を高める。
- ・業務改善を確実にを行い、勤務時間の適正化を図ると同時に、児童に向き合う時間の確保し、心の通い合う教育活動を実現する。

3 学校教育に関する重点取組に対する自己評価

(基準 4:十分達成できた 3:達成できた 2:取り組んでいるが、成果は出ていない 1:取組が不十分である)

1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む	評価
(1) 授業改善の取組を促進するとともに、家庭との連携により、学力向上を推進する (2) 特別支援教育の取組を充実させ、自立や社会参加に向けた主体性を育成する (3) 食育を通して生活改善の取組を促進し、望ましい生活習慣を育成する (4) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る	3.0
取組とその成果	課題と改善策
授業研究会(全体研究会6回+1人1授業)を実施し、指導力向上と授業改善に努めた。また、月に1回程度、若手教師中心に自主的な勉強会が開かれており、授業や指導に関して具体的な課題解決の場としている。 全学年に自学ノート(チャレンジ学習)と音読カードをもたせ、家庭学習の習慣確立を図った。細かくコメントを書いてくれる保護者も多い。 特別支援教育コーディネーターを中心に、全教職員が要支援児童についての情報を共有できた。 クラス毎にランチルームで給食をとる際、栄養教諭が中心となって食育を行っている。また教室でも食の大切さや食習慣を見直させる授業を行っている。	授業規律や授業の進め方を少なくとも学年内で統一し、基礎基本の徹底と主体的な学習による確かな学力の獲得を実現しなければならない。 チャレンジ学習の達成率が低い児童や、保護者の協力が思うように得られない児童が一定数いる。自学の内容をある程度与えて取り組ませる等、打開策を模索している。 通常学級における要支援児が増加しており、その指導や支援の方法についての理解やマンパワーが不足している。その結果児童の特性に対して適切な指導ができていないことがある。児童理解の機会を増やすことと外部の専門家を招いてのケース研修等が必要である。 学年が上がるにつれ外で体を動かして遊ぶ児童が減っている中、体育の授業だけでは体力向上は望めない。学校として授業以外の取組を検討する必要がある。

2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る	評価
(1) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (2) 道徳性育成の取組を促進し、思いやりに満ちた人間関係及び社会との関わりづくりに努める (3) 各校のいじめ防止基本方針に基づき、誰もがすごしやすい学校の環境づくりに努める (4) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成する	3.0
取組とその成果	課題と改善策
生活委員会を中心に年間を通してあいさつ運動に取り組んだ。自分から、相手の顔を見てあいさつ	基本的な生活習慣の確立には家庭の理解と協力が不可欠であり、担任からお願いしたり通信等で呼び

<p>をする児童が増えた。「生活がんばり表」を担当が細かくチェックし声かけすることで、望ましい生活習慣の確立を目指した。</p> <p>毎学期いじめアンケートを実施する中で、いじめ認知について全教職員が共通理解し、ひとりひとりの児童をしっかりと見るようになった。いじめ、もしくはいじめの芽を早期に発見し、対応することができた。</p> <p>6年生対象に、園田公民館の「社会教育地域力創生事業・生き方探究キャリア教育」を実施した。様々な職種の方から話を聞いたり質問したりすることで、将来の夢や進路についてある程度具体性をもって考えさせることができた。</p>	<p>かけたりしている。改善の傾向が見られない一部の児童に関しては辛抱強く働きかけていく。また、学校における基本的な生活習慣(名札、整理整頓、手洗い等)については担任のこまめな指導を継続していく。</p> <p>いじめの認知基準を全教職員で確認する機会を何度も設定することが大切である。ほとんどの教師の意識は変わってきたが、まだ少し認識が甘いと感じることもあるので、その都度確認していく必要がある。</p> <p>キャリア教育は、他の課題教育と同様、年間指導計画に基づいて教科や行事の中で行うことになっており、そのことをきちんと意識して取り組む必要がある。</p>
---	--

3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む		評価
(1) 教職員の資質向上の取組を促進し、業務改善を進めながら学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 地域の教育力を活用した取組を促進し、地域とともにある学校園づくりを推進する		2.5
<p style="text-align: center;">取組とその成果</p> <p>積極的に授業を参観し合い、学び合う体制を作っている。また、何でも話し合える職員集団であるよう、教頭やミドルリーダーが環境づくりをしている。校内での研修に加え、各自がキャリアステージに応じた研修を積極的に行い、資質と能力の向上を図っている。</p> <p>国が推進する「学校における働き方改革」について、年度当初は教職員にまだ十分に浸透してなかったため、中教審の答申や文科大臣のメッセージ等を周知した。定時退勤に対する意識が変わってきたことと、例年通りで行っていた行事の見直しができる。次年度は家庭訪問の内容を変更することが決まった。</p> <p>小園まつりで、近隣の作業所の方と太鼓を演奏したり、老人クラブの方に昔遊びをおしえてもらったりして今年も交流を図ることができた。</p>	<p style="text-align: center;">課題と改善策</p> <p>担任の平均年齢が26才、40代担任は1名という極端な年齢構成のため、若手の育成は容易でない。OJTを中心に行い、各自に責任と自覚をもたせることで全体としての組織力向上を図っていく必要がある。</p> <p>新指導要領実施となる次年度は、指導法の見直しや教材研究に多くの時間と労力が必要であり、同時に子どもと向き合う時間も確保しなければならない。そのため、さらなる思い切った業務改善を行っていかねばならない。</p> <p>地域の教育力の活用について、力を貸してほしい学校と力を貸したい地域のマッチングがうまくできていないので、地域学校協働活動推進員を活用して調整していきたい。地域に出て行くのが管理職だけになってしまっているのが課題だが、勤務のことを考えると改善しにくい問題である。</p>	

4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る		評価
(1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る		2.5
<p style="text-align: center;">取組とその成果</p> <p>毎月の安全点検を確実にを行い、危険箇所をいち早く発見することで事故を未然に防いできた。点検で不備が見つかった箇所は早急に補修するようにしている。登下校の指導に関しては、各学期はじめに職員が登校時に巡回し、通学路の点検も兼ねて安全指導を行っている。また、毎朝の通学路では地域</p>	<p style="text-align: center;">課題と改善策</p> <p>安全点検では毎月のように補修が必要な箇所があがってくるが、校舎の老朽化のため修理が追いつかない上、経費の捻出が難しいものも多い。事務職員と相談し、優先順位をつけながら可能な策をひねり出している。今年度は不審者対応研修ができなかったため、来年度は実施する。実際に危険人物が侵</p>	

<p>の安全ボランティアとPTAに見守りをさせていただいている。</p> <p>防災教育については、阪神淡路大震災や東日本大震災等の教訓を生かす防災教育の推進を目標に、資料やDVDを活用しながら児童の防災意識を高めた。火災、地震の防災訓練及び引き渡し訓練を計画的に実施した。</p>	<p>入した場合、水際対応が大切なので、そこに特化したシミュレーションや訓練を何回か行う必要がある。</p> <p>今年は大雨や台風等の自然災害による休校はなかったが、防災訓練では様々な時と場所、場合を想定しておく必要がある。</p>
---	---

教育目標		評価
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実		3.0
取組とその成果	課題と改善策	
<p>全ての教育活動が、教育目標である「認め合い、支え合い、高め合い—子どもの主体的な取組を重んじ、子どもが生き生きと活動する学校」の達成に向けてなされているのだということを全職員が意識し、教育目標をもとに、学年目標や各課題教育の全体計画等が作成されるのだということを周知した。また、子どもたちにも伝わるよう、「小園の子」(目指す児童像)を教室に表示したり、朝会の講話で伝えたりした。</p> <p>各学年、各分掌が目標具現化のための具体的な方策を策定し、教育活動の一貫性を図った。</p>	<p>学校目標を学年目標、クラス目標とともに各教室に掲示し、教職員にも児童にも常に意識させたが、その達成に向けた教育活動や教育内容の充実には十分に繋がらなかったとは言えない。職員会議や各部会、朝会や集会活動等で教育目標や学年目標を意識させるような機会をさらに増やしていかなければならない。</p> <p>各教師が教育目標の旗印の下、まわりの人たちと協働しながら主体的に生きることができる児童の育成に向け、授業改善や生活指導改善を進めていく。毎日の授業や指導を何のために行っているのかが明確になることが教職員のやりがいにつながり、充実した教育活動が実現できると考える。</p>	

研究テーマ		評価
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実		3.5
取組とその成果	課題と改善策	
<p>研究テーマ「課題に進んで取り組み、道筋を立てて考える子」を育成するため、学年毎に具体的な目標を設定し、授業研究に取り組んだ。</p> <p>「しかけとつぶやきで創るアクティブな授業」をサブテーマに、主に算数科の授業において、子どもたちが発する素直で素朴な発言を拾い上げ、子どもたち自身が「確かめたい」「やってみよう」と考えて学習に主体的に取り組めるようにした。</p> <p>年6回の授業研究会と、1人1授業の公開をし、互いに意見を出し合いながらよりよい方策を追究した。</p>	<p>年6回の授業研究会のうち3回は関西大学付属小学校の尾崎先生を招聘し指導・助言をいただいた。(3回目は臨時休校により、授業は見えていただけなかった。)回を重ねるごとに各自の意識が変わり、日々の授業や指導に生かされてきている。</p> <p>しかし、研究と学力向上とがうまくリンクしているとは言えず、何のために研究するのか、という根本的な前提を今一度確認する必要がある。学力の低い層の子どもたちが置き去りにならないよう、基礎基本を保証しながら研究を進めていくよう改善する。</p>	